青山国際政経論集 107 号，2021 年 11 月

研究ノート

コロナ禍における文化移転と トランスナショナリズム 東京都内での韓国伝統音楽コンサート 開催の事例から（パート 1）

猿　橋　順　子*

1.　はじめに　コロナ禍の国際文化活動

2020 年から深刻化した新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は，それ自体がグローバル化や都市化と深くかかわっている。しかし，感染拡大を抑えるための国境封鎖は，必ずしもグローバル化やトランスナショナルなつながりを断ち切るものではない。人々はオンライン空間でコミュニケーションを継続，あるいは増幅させ，今まで以上に国際的な対話や協働が活発になった領域もある。国境封鎖による人の行き来の制約は，グローバル化，トランスナショナリズム，コスモポリタニズム，都市化，グローカリゼーションなどの用語で言い表される社会現象を抑制したというよりは，その内実に書き換えを迫るものとなっている。そして，そこにはデジタル化が広く深く関与していることは言うまでもない。

日本では，2020 年 3 月から，本稿を執筆している 2021 年 7 月にかけて，とりわけ演者の国際移動を含む文化・芸術活動のほとんどは中止，もしくはオンライン開催となっている。なかでも，演劇や音楽などの文化活動のうち，小・中規模の活動は厳しい制約を受けている。これには，もともと小・中規模の事

*　青山学院大学国際政治経済学部教授

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2021

業体は，資本面が脆弱な傾向にあることに加え，人的なつながりに頼った集客方法を取ることも関係している。また，小規模のライブハウスやイベントスペースは，地下にあることが多く，換気が十分に行えない。スタッフも限られた人数で運営している。そのため，感染症対策に不可欠とされる換気や，会場整理などを十全に行うことが難しい。仮に，これらの対応が出来たとしても，感染リスクを考えると，従来のように直接の知り合いを誘うことは憚られる。こうした，さまざまな制約から，イベント開催そのものを断念するという結論に至る事業者は少なくない。

2020 年 4 月 7 日に，東京をはじめとする 7 都府県に発令された第 1 回の緊急事態宣言[1)]が解除（5 月 25 日）された後も，野外・屋内を問わず，イベントは 9 月末まで開催制限が継続された。9 月 11 日，政府は当初の期日を前倒し，9 月 19 日から 11 月末までの期間，イベント類の開催制限を緩和すると発表した（内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室長 2020）。これを受けてイベント開催に踏み切るか，見合わせるかは，感染症対策を講じられるかどうかだけではなく，配役，稽古，集客，採算，評判，意義など，さまざまな観点からの検討を必要とした。

本論は，このイベント開催制限緩和期間の初期に，小規模なコンサートを開催した，東京都内で韓国文化を発信するイベントスペース併設のギャラリーを事例に，何が開催を実現させたのかについて，トランスナショナリズムの観点から分析し，報告する。トランスナショナリズムは，これまで物理的な人の行き来に注目されがちであったが（Appadurai 1996），人々が想像する空間に展開する実践も視野に入れるようになっている（Rogers 2015）。本論が事例とするイベントは，国境を跨ぐ人の往来が制限されたコロナ禍において，東京都内で「想像の韓国空間」を創り出す実践例ともいえる。その企画から実行までの過程において，どのような有形・無形の文化資本と談話資源（Bourdieu 1998, Holstein, J. & Gubrium 2000）が用いられ，それはコロナ禍前とどう異なるのか。

1）　4 月 16 日には対象地域を全国に拡大。

このような問いに，ひとつの事例から読み解いていこうと試みるものである。

2. トランスナショナリズムと文化移転

グローバル化とトランスナショナリズムは，相補的な関係にあるが，着目点が異なる。グローバル化は，ある特定のモノやアイディア，生活様式などが世界中に広がっていくことに着目する。他方，トランスナショナリズムは，輸送と通信技術の発達と普及により，人々が出身国と移動先だけでなく，世界中に広がる移民ネットワークを頼りに，各地の政治的，経済的，社会的状況に応じて行き来する道程や，それに伴う情報や価値観の伝搬や流れに着目する。トランスナショナリズムは，個人が，その時々に置かれた場所で自集団と他集団を位置付け，モノや情報に加え，過去の記憶，将来の目標，人との関係性なども駆使して，その場での自身のありようを落ち着かせるさまを説明する（Ley 2010）。

さらに，Vertovec（2007）は，移民がそのルーツとする国や民族，言語，宗教のみならず，社会階層，教育，職業，在留資格，移住の道筋，ジェンダー，国際結婚，居住地など，無数の変数によって帰属集団を形成し，多元的な多様性（superdiversity）の中にあることに注目する。一般的に，ホスト社会の多文化共生施策は，移民の出身国のみを単位，基準として取り組まれる傾向にあり，移民コミュニティ内部の複雑な多様性までは視野に入れていない。そのため，多元的な多様性（superdiversity）を視野に入れたトランスナショナルな社会的・文化的な諸活動を紐解いていくことは，より浸透度の高い多文化共生社会のありようを考える上でも重要なのである（Vertovec 2007, 2009）。

Goffman（1956）は，人々が，その時々に置かれた場所と状況下で，どのような社会的役割を担いながら参加者として振る舞うのかを分析する上で，劇場の舞台装置をメタファーとして用いた。グローバル化とデジタル化により，個々が身を置く場の状況と参与者がめまぐるしく変わる中で，Goffman（1974）が提唱した frame analysis は，人々のアイデンティティや社会的役割の調整過程を整理する枠組みとして，しばしば参照される（e.g. Aarsand 2008, Vinson 2016）。

このように，人々の日常的な社会生活や行動様式を理解するために，メタファーとして劇場の舞台装置が参照されたわけだが，トランスナショナルな舞台芸術や文化創作活動を分析する上で，改めて Goffman が参照されるようになっている。それには，舞台芸術の諸活動がトランスナショナルな人の行き来と無縁でないことや，こうした文化移転がライフスタイルとして人々の日常の中に埋め込まれるようになったことによる（Prebensen 2017）。劇場についての研究と，社会的な相互作用秩序の研究の間にあった垣根は低くなり，両者のつながりを探究する研究も増えている。たとえば，Rogers（2015）は，絶え間ないトランスナショナルな流れや動きが集約される場所として劇場やフェスティバルなどの催事が行われる空間に注目している。

そこで，本論では，東京で韓国の文化やライフスタイルを紹介する，複合的かつ体験型の空間作りをしているギャラリーにおいて，コロナ禍のイベント開催制限緩和期間の初期に韓国伝統音楽の小規模コンサートを開催した事例について，トランスナショナリズムの観点から，何が実践を支える有形・無形の資源となったのかをコロナ禍前との比較で見ていくこととする。コロナ禍が文化活動や国際交流に及ぼした影響は大きく，その意味は時間の経過を経ての検証もなされていくことだろう。本論は，コロナ禍の国際文化活動の記録としての意義も含むものである。

3.　事例概要と調査手順

本稿で取り上げる事例の概要と調査の手順を示す。

3.1　事例概要：韓国ギャラリーでの伝統音楽コンサート開催

事例は，東京都内にある韓国雑貨を扱うギャラリー（以下，R とする）での催事ある。ギャラリー R の開業は 2018 年で，遡ると，オーナーが骨董品の鑑賞を趣味にしていたことが発端となっている。R は，伝統家具をはじめとする調度品や雑貨の輸入・販売，韓国関連書籍の紹介，手工芸品のワークショップ等の開催，韓（漢）方のお茶を主軸としたカフェと，有形・無形の韓国文化を紹介

する複合空間となっている。韓国の伝統的な調度品や手工芸品を，集めたり飾ったりするだけではなく，日常の暮らしの中に取り入れることを提案している。客層は「韓国好きの女性」が中心で，R の公式 Instagram や Twitter，Facebook を見て来店する人がほとんどである。

コロナ禍以降，来店客は減り，オンライン通販に比重を置いた営業となっている。さらに，商品を買い付けに韓国へ行かれないこと，ネットを介した商談で仕入れをしても納品まで時間がかかるなど，営業にはさまざまな支障が出ている。コロナ禍の初期には，カフェを併設している複合的な営業形態であることから，自治体が示す，どのガイドラインに沿うべきか判断に戸惑った[2)]。当該ギャラリーだけではなく，誰にとっても近い将来の予測が立てにくい状況下，コンサートは企画され，実行された。

コンサートは，2020 年 10 月初旬の某日，韓国の旧盆である秋夕（チュソク）のイベントと位置付けられた。演目は韓国伝統音楽の琴の演奏と舞踊で 30 分程度のプログラムが組まれた。当初はお菓子とお茶の提供も検討したが，感染症予防の観点から，韓国で秋夕に食す松餅（ソンビョン）と，ギャラリーオリジナルの韓（漢）方ブレンド茶を手土産とすることとした。客席は互いの距離が十分に保たれるように設置し，入場時に検温と手指消毒をする，終了後も来場者と連絡が取れるようにするなどの感染症対策が講じられた。平常時であれば 60 人強が収容可能だが，ソーシャルディスタンスを保つため，完全事前予約制とし 30 名で締切りとした。

3.2　調査手順

コンサートの前に，オーナーを含む主催者 2 名（A さん，B さん）および演奏

2）　当初，感染症対策のガイドラインは，省庁や自治体，業界団体，商工会や商店街などがそれぞれ互いに情報を集めながら作成していた。それらは所轄省庁がとりまとめた上で，内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室の公式 HP 上に掲載されるようになったが，内容は随時更新され，とりわけ複合施設においては運用が難しかった。本稿を執筆している 2021 年 7 月現在，政府がまとめたものだけで，23 業種，292 団体により，309 のガイドラインが運用されており，その一覧表は 27 頁におよんでいる（内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室 2021）。

者 2 名（C さん，D さん）の計 4 名に，催事を実施するに至るまでの経緯，準備状況，懸念事項などを聞くインタビューを実施した。B さんは，A さんと古くからの親しい友人であり，ギャラリーのデジタルコミュニケーションをボランティアで一手に担っている。4 名とも韓国ルーツを持つが，C さんのみ韓国で生まれ育ち，A さん，B さん，D さんは日本で生まれ育っている。

インタビューはコンサートの 1 週間前に実施した。オンライン会議アプリ Zoom を使用し，それぞれ 60 分である。当日は，リハーサルから本番にかけて参与観察を行い，録画も行った。催事の前後に，当日のお手伝い（A さんの友人数名）および来場者数名に簡易な聞き取りを実施した。コンサートの案内の告知から終了後まで，Instagram，Twitter，Facebook の SNS を通読した。なお，コンサート本番は隣接分野を専門とする研究者に同行してもらい，後のメンバーチェックにも参加していただいた。

調査は 4 名に対し，書面および口頭で研究の趣旨を説明した上で，「調査参加への同意書」を二通作成し交わした。インタビューは終了後，逐語録を作成した。また，本稿の草稿の段階でインタビュー記録の掲載許可を得た上で，メンバーチェックを実施した。なお，プライバシー保護のため，固有名詞はすべて匿名，伏せ字としている。以下，分析文中の鉤括弧は，逐語録からの直接引用である。

4.　韓国文化紹介の空間形成

ギャラリー R の韓国文化紹介の空間形成について，コロナ禍以前とコロナ禍に分けて紹介する。コロナ禍以前については，インタビューの語りからまとめる。コロナ禍についてはインタビューに参与観察の記録を交えて紹介する。コロナ禍の活動には，日常の営業の様子から，韓国伝統音楽のコンサートの実施までを含める。

4.1　コロナ禍以前

オーナーの A さんが最初に韓国の調度品の魅力に触れたのは，A さんが 20

代の頃，1980 年代後半だったという。当時，日本で「李朝家具ブーム」があったと言及されたが，A さんはそれ以前から「骨董品とか，割と日本のものでも好きだった」のだと振り返る。趣味の韓国舞踊も 20 年以上続けている。それが「韓国と伝統」というコンセプトをもったギャラリーの開設につながることとして，以下のように語られた。

> 韓国舞踊も長くやっておりまして，やっぱり伝統的なものと接する期間が長かったんですね。韓国舞踊の衣装であったりとか，装身具であったりですとか，そういったものも，ちょっと長く，ちょっといいものを見るチャンスに恵まれていたのかなとは思います。

ギャラリーを始めたのは，開業したいという目的意識があったというよりも，上記の「長くお世話になっている衣装の先生」から，韓国でギャラリーを開業するという話を聞いたり，周りの人からの助言や紹介が重なり，「温めていたというよりは，何か流れるままにこうなっちゃったという感じ」なのだと言う。

開業後も人との出会い，縁に触発されるように取り組んでいる。A さんにとってギャラリーは実は副業で，本業は薬局経営であり，薬剤師としておよそ 40 年のキャリアをもつ。職業柄知り得たモノやアイディアが，ギャラリーのカフェ併設にも結びついた。

> （韓国の）T 大学の先生から，韓国の漢方のお茶を勉強する機会がありまして，漢方薬って必ず煮出さないと飲めないものなんですけれども，お湯を注ぐだけで飲めるっていうのを作られた先生がいらっしゃって，これは皆さんに提案したいなと始めたんです。

A さんがギャラリー空間を通して紹介している韓国文化の担い手は，韓国人とは限らない。韓国の手工芸の技法を用い，日本の素材で創作している作家は日本人である。さらに，内容が韓国から離れることすらある。

韓国と伝統だけにこだわってるわけではなくて，日本の，たとえば民芸，益子焼とかの展示会もしたんです。なんて言うか，手の，手仕事みたいな，ぬくもりがある感じ。そういう共通点で今後もやっていきたいって思っています。

A さんを，あるいは A さんのギャラリー空間を知っている人が，「こんな人がいる」と情報を寄せてくれる。A さん自身も展示会などに出かけ，「いいもの」を探して歩く。大半が韓国文化だが，韓国以外の文化を排除しているわけではない。最後は，A さん自身が「素敵」と感じられるかどうかである。そうして集めた情報を頼りに実際に訪問する。自分の目で確かめ，話を聞き，「紹介したい」と感じたことをギャラリー空間に持ち込み，形にしていく。A さんなりの「いい」の判断基準は，丁寧な，丹精を込めた，手のぬくもりが感じられるモノ，コトと言い換えられる。

4.2　コロナ禍での営業とコンサート開催

出会いから，手仕事の様子を見る，作品を手に取って確かめる，作家の話を聞く，という過程を大切にするギャラリー R にとって，コロナ禍による国境封鎖は直接の打撃となった。予定していた展示会は無期延期となっている。一部，雑貨類の販売は，かねてから運用していた SNS でオンライン通販をしているが，緊急事態宣言が解除された後，ギャラリーを開けるかどうかさえ判断がつきかねた。

状況把握が難しいこと，何が「一般的」なことで，何が相互了解されていることなのかが分からないことは，これまで当たり前のように取っていた一連の行動ひとつひとつに見直しを迫る。たとえば，カフェを併設しており，そのカフェではちょっとした軽食も提供する。軽食を提供することを控えれば良いのか，カフェ事業を停止させればよいのか，あるいはギャラリーそのものを休業とすべきなのか。それは，周囲の人々が，R をどのような社会的機能を持った場所であると認識しているかにもよる。

コンサートの開催に踏み切った経緯は，B さんによって慎重かつ多方面への配慮と不安をもって語られた。その不安には，「悪く思う人はいくらでも悪く思ってしまう」と，筆者達が実施している，主催者と関係者の思いを聞くという趣旨の当該インタビューも含まれる。不安を挙げればきりがないのだが，それを押してイベント開催への決断を支えた根拠として，①近所の劇場や市民館で演奏会などが開催され始めていること，②演奏者が，A さんが通う舞踊教室を通して古くからの知り合いであり，感染症対策を含め，諸事情を率直に話し合えること，③ A さんが医療関係者で感染症の知識や情報が把握できること，④韓国の旧盆，秋夕（チュソク）に合わせて，韓国に行くことができない人たちに韓国を感じる時間を提供したいことが挙げられた。

特に，④についての語りには，コロナ禍の制約を，特徴に転換する創造的な面が見られた。

> 韓国だと，旧正月と旧盆は大事なお休みの日ですよね，昔から。日本で韓国に行きたいなと思ってる人とか，コロナで行けなくて寂しいなと思ってる人に来ていただいて，李朝家具に囲まれた空間で韓国の伝統音楽を聴いていただいて。ちょうど満月が翌日でちょっと足りないかもしれないんですけども，ちょうどライブが終わって外に出て，おうちに帰られる頃に満月が見えると思いますので，そういう余韻も楽しみつつ。チュソクに食べるお餅があるんですね。それを，いつもでしたら，お出しできるんですけども，コロナなので，おうちに持って帰ってご家族の方とプチチュソクっていう感じですかね。小さなチュソクを楽しんでくださいっていう。家に持って帰って行くのも，満月を眺められるので，それはそれでいいのかなと思って。……だから，あとはお天気だけが心配。

このような思いで企画した韓国伝統音楽の小さなコンサートは，数日で事前予約が定員となり，多くの来場希望者からの申込みを断ったという。主に SNS を媒介しての告知なので，「誰の何に響いたのか」を特定することは出来ないが，上記に抜粋した「プチチュソク」の「ストーリー性」に共感を得ることが出来たのではないかと語られた。

5.　考察

ギャラリーRのコロナ禍前の活動と，コロナ禍のイベント開催制限緩和期間の初期に韓国文化のコンサートを実行しえた経緯の語りを比べてみると，現有する文化資本や談話資源の状況変化に応じた意味の書き換えが認められる。それらを，(1) 医薬と医療従事者，(2) デジタルコミュニケーションと近隣コミュニティ，(3) 韓国の秋夕（旧盆）と日本のお月見，の三項目に分けて考察する。

5.1　医薬と医療従事者

ギャラリーのオーナーAさんは，薬剤師を「本業」としており，コロナ禍以前の活動においては，韓国人の専門家から学んだ「煮出さなくても飲める」手軽な「韓（漢）方茶」を紹介したいという思いからカフェ併設に至っている。それは，飲食を控えることが優先されるコロナ禍においては懸念の種となった。

他方で，コロナ禍でイベントを開催する上で，Aさんが医療従事者であることは，感染症についての正確な情報が適宜得られるということへの安心感，信頼感につながっている。これはAさん自身によって前景化されたものではなく，Bさんを始めとするギャラリーのスタッフ，招かれる演奏家（Dさん）が等しく指摘したことである。

ただし，職業としてAさんが医療関係者である，ということだけではなく，Bさん，Dさん共に長年の知己であり，どのように医薬に向き合ってきたかという経緯に直接触れてきたことも関係している。Dさんは，感染症対策について，本番前は，「（当日，現場で）気になることがあれば，率直に申し出ようと思っている。そういう信頼関係があるから（コンサートが）できる」と話していた。実際には，換気対策をはじめ感染症対策はDさんが想像していた以上に行き届いており，その後，自分たちの演奏会の企画を立てる際の参考になったとのことだった。

5.2　デジタルコミュニケーションと近隣コミュニティ

ギャラリーRは近隣商店と密接な関係をもっているわけではない。従前から，

来店者はSNS等でギャラリーの存在を知り，携帯端末のナビゲーションを頼りに来る人がほとんどだそうだ。コンサートの来場者で，かつてこの街に暮らし，今もお気に入りの店を目当てに来ることがあるという人が，以下のように語った。

> ここにこういうギャラリーがあることは知りませんでした。でもこの街には，こういう何かこだわりのある個性的なお店やギャラリーが結構あるので，この街らしいと感じます。面白いスポットを見つけたから，いつかまたお茶しに来ようと思います。

オーナーのAさんは，デジタルコミュニケーション技術には不得手で，ほとんどをBさんに任せている。コロナ禍で韓国に物品の買い付けに行くことはできなくなったが，オンライン通販で情報発信を継続できていることが，潜在的な顧客との関係を継続する上で役立ち，イベント開催も支えている。事前の出演者との打ち合わせもオンライン会議アプリを用いて行った。

同時に，SNSをはじめ，デジタルコミュニケーションが持つ不透明さは不安材料にもなる。イベントを開催すること自体が非難される危険性も排除することはできないし，SNSの投稿を見て申込みをした人が，何に訴求されたのかも分からない。どのような層の人が来場するのかを知り得ないということは，出演者にとっても選曲やその説明，演奏時間の調整等を難しくさせる。

他方，コロナ禍以前の活動を語る際には，何も言及がなかった周辺の施設や店舗の催事や営業について，コロナ禍では，コンサート実施を判断する拠り所として語られた。これは，SNSへの依存が高まることで生じる不安を軽減させる一面をもっている。コロナ禍でデジタルコミュニケーションへの依存度は高まったが，それがもたらす不透明性を補う上で近隣コミュニティの様子や動きに目が向けられている点が注目される。

5.3　秋夕（旧盆）とお月見

コロナ禍の韓国伝統音楽コンサートは，韓国の重要な祭日である秋夕（旧盆）

に合わせて企画された。秋夕は旧暦の 8 月 15 日，十五夜（満月）となる。ソウル出身の C さんはチュソクを以下のように表現する。

> チュソクといったら，お盆。日本のお盆ってカレンダーにはないですけど会社とか休んでいたり，みんな移動して大渋滞になったりする。韓国は思い切りカレンダーにも入っていて，その前後もちゃんと祭日になっています。韓国ももちろん大渋滞なんですけど，私も小さい頃から家族がみんな集まろうという親戚だったので，いつもチュソクになると大渋滞の中，田舎のおばあさんのところに行って，父が 5 人きょうだいで親戚が多いので，それぞれ子どもも全部連れてくるので大人数で遊んだりするんです。

韓国で 5 年近く暮らした経験を持つ D さんも，チュソクには「お祭り」のような「華やか」な印象があるという。「渋滞」，「親戚で集まる」，「大人数で遊ぶ」，「お祭り」は，いずれもコロナ禍では回避されなくてはならない。

R でのコンサートは，この秋夕を「お盆」ではなく「お月見」に焦点をあてている。選曲を任された C さんは，「チュソクの曲というのはないので，月にちなんだ曲を選びました」と言う。それは，韓国に暮らす琴奏者の旧友から SNS 経由で情報を得，楽譜もインターネットで取り寄せる。東京で韓国伝統音楽の演奏を続ける上で，こうしたデジタル活用はコロナ禍前と変わっていない。

音楽コンサートは休憩もはさんで 1 時間半から 2 時間程度とするのが一般的である。開演から終演までを短くする上で，コロナ禍でなければギャラリー内で提供するはずの「軽食」をお土産にし，早い時刻に来場者を帰途につかせることで，家に帰る道すがら，「ちょっと足りない」満月が見られる。韓国伝統音楽の「余韻」を覚えながら，家路につき，月を愛で，家族で餅を楽しむ。演奏時間が 30 分であったとしても，この「プチチュソクのストーリー」には，ゆうに 2 時間を超える体験が提案されている。

そして，それはまるきり新しい，斬新なストーリーではなく，日本のお月見の文化，文脈にも符合する。韓国のチュソクでも月見はするが，やはり賑やかな雰囲気が連想されるという。しかし，日本のお月見は，一般的に各家庭で静

かに過ごされる。B さんは，SNS を介して発信した，この「ストーリー性が（人々に）響いたのではないか」と話してくれた。それは Twitter のリツイートから，そのように推察されるとのことだったが，調査者として一連の動きを観察していた筆者の目にも，B さんの解釈は妥当と感じられた。お土産には，A さんオリジナルブレンドの「韓方茶」も添えられていたのは既述のとおりで，この一連のストーリーはライフスタイルの提案にも読める。

ギャラリー R での小さなコンサートの開催は，韓国に行くことができない人々に向けて，韓国を想像的に体験する空間が演出されている。それは戦略的にというよりも，結果的に日本の生活文化に文脈化されるものとなった。コロナ禍ゆえの制約に対処した結果，なかば偶発的に，されど必然的に生まれた文化混淆の具体例といえるのではないだろうか。

6. 結論

2020 年，新型コロナウイルス感染症の世界的な流行による国境封鎖により，物理的な国際文化交流活動は壊滅的と言っていいほどの制約を受けた。本論で紹介した事例は，そうした状況下の東京で，韓国人にとって大切な年中行事に合わせ，想像的な韓国空間を作り出そうとした実践とも言える。そこには複合的な文化資本と談話資源の意味変容が認められた。

文化資本と談話資源の意味変容は，コロナ禍前のギャラリーの営業についての語りにも等しく認められる。ギャラリー R で紹介するモノやコトの選定基準について，「韓国と伝統」から「ぬくもりが感じられる手の仕事」へ意味の拡張が見られた。コロナ禍前とコロナ禍の比較で顕著なことは，コンサートの開催に踏み切る際に表出した，意味変容のダイナミックさである。

コロナ禍以降の文化資本および談話資源の意味変容として，本事例からは，医薬と医療従事者，デジタルコミュニケーションと近隣コミュニティ，韓国の秋夕（旧盆）と日本のお月見の 3 つを導出した。特に，感染症の脅威という情勢において，A さんの本業が医療関係であったことは，とりわけ意味が大きい。多くの小中規模団体が対面型の文化関連イベントを見合わせていた時期に，実

行を可能にした要因のひとつといえる。

本稿が注目した，想像の韓国空間は，Rogers（2015）が指摘したように，それぞれが固有のトランスナショナルな軌跡を辿ってそこに集まったヒト，モノ，コト，ワザ（技）の集積によって創り出されている。言い換えると，コロナ禍という誰も経験したことがない制約に対処することを通じて，既存の有形，無形の文化資本や談話資源に意味変容が促され，それらが再編成（reassemble）された事例とも見ることができる。

さらに注目すべき点は，その過程で，図らずも日本で培われた文化への文脈化を成功させており，文化混淆とも読める実践を生み出している。それは，すなわち，コロナウイルス感染予防の観点から要請される，不要不急の外出，飲食，長時間同じ場所で過ごすことなどを避けるという制約を，「日本風のお月見をしながら韓国伝統音楽の余韻を楽しむ」ことに転換させている。この転換は，「新しい日常」のライフスタイルの提案にも結びつき得る。

こうした転換が，コロナ禍という特殊な状況においてのみ取られる一過性のものなのか，これからも試行され，創造され続ける文化混淆の契機となるのか，さらには，その社会文化的な意味付けなどについては未知数である。これからも引き続き見ていく余地がある。

7.　おわりに

本論は，新型コロナウイルス感染症の流行により，イベント開催制限の緩和措置に移行した比較的早い段階で，東京都内で韓国伝統音楽のコンサートを実施したギャラリーでの実践を事例に，小さなコンサート開催までの経緯と，それを実現可能にした要因を文化資本や談話資源の意味変容に見た。文化資本や談話資源の意味変容はギャラリーの開業から最近までの，コロナ禍前の語りにも認められたが，コロナ禍以降の営業，とりわけコンサート実施に至る語りにおいてはダイナミックに認められた。

インタビューの最後に，A さんは筆者の問いかけを待たずに以下のように付け加えた。

もうひとついいですか。古いものってやっぱり限りがあって，もうそれ1つしかなくて，誰かの手に渡ったら二度と同じものは入らない。ですけど，新しいもので，今頑張ってる若い作家さんたちがいらっしゃって。その人たちは，今それを生業として，作品を買ってもらって生計を立てていらっしゃる。そういう人たちの力に少しでもなってあげたいって最近思っていて。たとえば民画とか，白磁とか。古いものの歴史をたどりながら今，頑張って作ってらっしゃる方。そういった方々とのパイプも太くしていきたい。そう思っているところなんです。

こだわりもあるが，時にそのこだわりを手放す潔さも備える。それが，制約に直面してなお，現有の文化資本・談話資源の意味変容を助け，促し，実践を継続させる。同時に，これらの意味変容を土台で支えているものとして，本稿の前半で取り上げた「ぬくもりが感じられる手の仕事」，「長い付き合いを通して培ってきた信頼関係」が変わらずにあることも忘れてはならない。Rogers（2015）は，舞台芸術におけるトランスナショナリズムを「関係性の空間」（relational space, p. 169）と捉え，既存の関係性を基盤にしながら，新たな関係性を絶え間なく紡ぎ出していくところに，ステレオタイプの打破，文化的創造の可能性を見る。当該事例からは，いかなる制約のもとにも間断なく紡ぎ出されるトランスナショナルな営みのしたたかさとしなやかさとが見出される。

謝辞：コロナ禍において本調査にご参加くださった方々に心からの謝意を表します。また，コンサートに来場し，本論の草稿の段階で貴重なコメントをくださった岡部大祐さんに御礼申し上げます。本調査の一部は，青山学院大学国際政治経済学部附置国際研究センターの助成を受けています。

引用文献

Aarsand, P. A.（2008）. Frame switches and identity performances: Alternating between online and offline. *Text & Talk*. *28*（2）: 147–165. https://doi.org/10.1515/TEXT.2008.007

Appadurai, A.（1996）. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Bourdieu, P. (1998). *Practical Reason: On the Theory of Action*. Stanford: Stanford University Press.

Goffman, E. (1956). *The Presentation of Self in Everyday Life*. London: Penguin.

Goffman, E. (1974). *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Cambridge: Harvard University Press.

Holstein, J. & Gubrium, J. (2000). *The Self We Live By: Narrative Identity in a Postmodern World*. New York: Oxford University Press.

Ley, D. (2010). *Millionaire Migrants: Trans-Pacific Life Lines*. Chichester: Wiley-Blackwell.

Prebensen, N. K. (2017). Successful event-destination collaboration through superior experience value for visitors. In E. Lundberg, J. Armbrecht, T D. Andersson & D. Getz (Eds.), *The Value of Events*. (pp. 58–72) London: Routledge.

Rogers, A. (2015). *Performing Asian Transnationalisms: Teatre, Identity and the Geography of Performance*. Oxon: Routledge.

Vertovec, S. (2007). Superdiversity and its Implications. *Ethnic and Racial Studies, 30:* 1024–1054.

Vertovec, S. (2009). *Transnationalism*. London: Routledge.

Vinson, A. H. (2016). 'Constrained collaboration': Patient empowerment discourse as resource for countervailing power. *Sociology of Health and Illness*, 38: 1364–1378. https://doi.org/10.1111/1467-9566.12480

参照 URL

内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室長（2020, September 11）「11 月末までの催物の開催制限等について」https://corona.go.jp/news/pdf/jimurenraku_20200911.pdf

内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室（2021, June 11）「業種ごとの感染拡大予防ガイドライン一覧」https://corona.go.jp/prevention/pdf/guideline.pdf?20210614